

高知市立

# 自由民権記念館紀要

No.28

2024. 3

(令和 6)

---

○資料紹介

吾川郡秋山村 細川梶日記－近代高知における女性の日常をよむ－

..... 濱田 実侑

---

高知市立自由民権記念館

# 吾川郡秋山村 細川梶日記

―近代高知における女性の日常をよむ―

濱田実侑

## はじめに

### 一 細川家資料における日記資料

高知市立自由民権記念館には、地方政治家であり、明治期には地域の中心人物として自由民権運動に関わった細川義昌（一八四九―一九二三）が現在に伝えた「細川家資料」が寄託されている。なお、細川家は吾川郡秋山村（現在の高知市春野町）の郷士である。義昌の父・義郷以降三代にわたる家系については【資料一】を参照されたい。

「細川家資料」は一、二、〇〇〇点を超える大資料群であり、当館への寄託以前から高知県史や春野町史をはじめ諸研究で引用されてきた。特に日記資料については、『細川家資料目録』に収録されている「細川家資料解題」で「近世・近代にまたがる記録として、また特に女性日記を含むという点で稀有な例であり、本文書群を貴重ならしむる主要部分の一つとなっている。従前の諸研究で本資料群が珍重されてきた理由の多くは、かかる日記資料の現存にあるとも言えるのである。」と指摘されるなど、その存在は重要視されてきた。

細川家資料には、義郷、義昌、義昌の母・梶、義昌の養子（のち当主）・義方、義昌の二女・雅の日記が伝わっており、義郷や義昌の日記は、前述の指摘のとおり様々な研究において活用されている。しかし、梶や雅の日記については、管見の限り引用される機会はなかった。

細川家の女性日記には、家の中での出来事、近所付き合い、食事（調理を含む）、家族の健康、子育て、家計記録等、家庭を中心に生活していた女性にしか知り得ない内容が豊富に含まれる。これこそが女性日記の特色であり、貴重とされる所以であろうが、逆に言えば、自由民権運動をはじめ近代高知

の主要な出来事に関する記述はほとんど見られない。また、極めて私的な記述であるため、一部を解説したとしてもその背景や意味を捉えにくい。こうしたことから同家の女性日記は活用されにくかったと考えられる。

本稿は、細川家の女性日記のうち梶の日記（以下「梶日記」）を通読し、その内容や特色を解説するものである。本稿が梶日記を広く活用いただける一助となれば幸いである。

### 二 細川梶略歴

文政九年七月五日、高知城下の田所久作の家に生まれる<sup>一</sup>。弘化五年一月に義郷と婚約し、翌嘉永二年一〇月に長男義昌が誕生したが、一度離別している<sup>二</sup>。その後帰縁し、安政元年一二月三日、次男義徳を出産<sup>三</sup>。四六歳の時に義郷が死去<sup>四</sup>するも再婚はしていない。

明治一八年、五八歳でキリスト教に入信<sup>五</sup>。以降、晩年まで熱心な信仰を続ける。高知教会の婦人会が行う祈祷会で司会をつとめた<sup>六</sup>ほか、細川家が伝道活動の拠点として秋山村に設置した「秋山講義所」では、義昌とともに教員として講義を行った<sup>七</sup>ことが、梶日記から確認できる。なお、眼科手術の失敗から片目の視力を失っていた<sup>八</sup>ため、教会等への外出の際は家族や女中らが同行することが多かったという。また、持病として神経痛を患っており<sup>九</sup>、そのために梶日記には自宅で灸をすえたという記述が頻繁に登場する。

大正三年八月七日、脳溢血<sup>一〇</sup>のため死去<sup>一一</sup>。八九歳であった。梶日記は、明治二八年一二月（六九歳）から、死去の四日前にあたる大正三年八月三日（八九歳）まで、晩年の記録が伝わっている。

## 梶と「記す」こと

梶日記の内容に入る前に、梶にとって「記す」ことがどの程度身近なものであったのか、関係資料や、梶の曾孫（義昌長女・津留の娘）である中沢静の著書『無一老人』から整理してみたい。

静によると、梶は幼少のころから読み書きを好み、寺子屋教育を受けたのち、「山内藩の御右筆として徳川家との文通の代筆をしていた」<sup>一二</sup>。そのた

め、梶の後年の思い出話は専ら「御殿での生活」についてだったという。梶が城内で「だんなさま」と呼ばれていたこと、城内で着ていた美しい小袖を見せてもらったこと（この小袖は静の母である津留が譲り受けたという）、追手門から城内に入ってすぐ左手にあった井戸に関する噂話など<sup>一四</sup>、静が梶から聞いた思い出話はいずれも具体的である。また、静が梶を思い出す時に浮かぶのは「御殿を下る時に丁戴して来た小さな文机に向った後姿」<sup>一五</sup>だという。梶日記もこの文机で記していたのだらうか。

梶の思い出話に関する記述は、雅の日記<sup>一六</sup>にもみられた。一家で「公園」へ梅花見物に行った際、梶は「しきりに昔の山内家のありし有様こゝにてあそこにてと話に余念もな」かったという。そして日記の最後には「梅の下香のみ残れる城あとに昔話しの跡は咲きけり」という一句が添えられている。「公園」とは高知公園、つまり高知城のことである。若かりし梶が城内で何らかの職に就いていた可能性は高い。

また、梶日記には、梶の「記す」能力に関する興味深い記述があった。梶が高知教会の「老婦人祈祷会」<sup>一七</sup>や「第二婦人会」の会計係を担当しているのである。梶日記には集金額を各会の帳面に記したこと等が記されているが、注目すべきは、梶が会計係となった経緯である。「第二婦人会」の会計係については、高知教会で指導的役割を担っていた「門田氏」<sup>一八</sup>からの依頼を引き受ける形で担当しているのである<sup>一九</sup>。梶の「記す」能力は、周囲からも高い評価を受けていたといえよう。

## 梶日記について

### 一 本稿における梶日記

本稿における梶日記とは、「細川家資料目録」の分類でいう「B 個人日記・雑記」の「6 梶（日記）」のうち、筆者が家計簿や覚書の性質が強いと判断したものを除いた全一八冊を指す（詳細は【資料二】参照）。なお、「7 梶（教会日記）」については、いずれもキリスト教徒としての日課や教会での説教内容等を記したもので、梶の日常生活の記録とは考えにくいいため、本稿における梶日記には含んでいない。

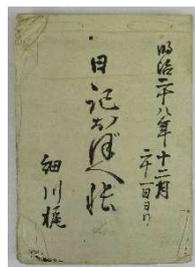
### 二 「モノ」としての梶日記

梶日記は、『当用日記』等のいわゆる市販の日記帳ではなく、細川家が独自に和紙で作成した日記帳に筆で記されている。この日記帳について、静は「義昌は毎年年末になると、陽射しの暖い南のえん側で土佐半紙を二つに折るのを孫に手伝わせながらキリで穴を明け<sup>二〇</sup>こよりで見事に翌年の日記帳二冊を作っていた。一冊は母梶の分である」<sup>二一</sup>と述べているが、梶・義昌いずれの日記も一年未満で一冊を終えたものがほとんどである。したがって細川家ではこの日記帳を年に何度か作成していたとみられる<sup>二二</sup>。

次に、梶日記のサイズである。明治三六年四月二日までの六冊は、いずれも半紙判より一回り小さい程度である（【写真一】）が、明治三六年四月一九日以降の一・二冊については、それまでのサイズよりたて幅が十センチ程度長くなっている（【写真二】）。

梶は、市販の日記帳のように一頁につき一日分の記録を記入するという記入方法を取っていない。

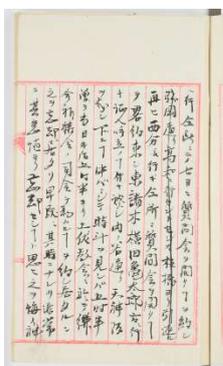
前日の文章が短く終われば続けて翌日の日記を書き始めるし、逆に一頁に文章が収まらなければ次の頁に続けて記している。一般的に、帳面のサイズが大きくなれば自然と記入する文章も長くなるように思うが、梶日記においては、文章量、内容についても変化は見られない。したがって日記帳のサイズの変化は、梶の記録行為に影響を与えていないようである。また、義昌の日記はそのほとんどで罫線入りの和紙（【写真三】）が採用されているが、梶日記は、罫線がない和紙（【写真四】）である。罫線があれば行間等の体裁が整うが、



【写真一】



【写真二】



【写真三】細川義昌日記

（細川家資料 B-3-15）より

罫線がなければ記入時の自由度が高まる。梶は後者を好んだのであろう。

つまり梶は、日記帳のサイズや罫線にとらわれず、記録すべきことを確実に記す、ということを優先していたようである。

### 三 梶日記を記した場所

細川家は、高知市内で仕事をしていた義昌の滞在先として、明治一九年二月に高知市唐人町へ別邸を構えた<sup>三三</sup>。そして明治三六年には高知市鷹匠町へその場所を移した<sup>三四</sup>という<sup>三五</sup>。

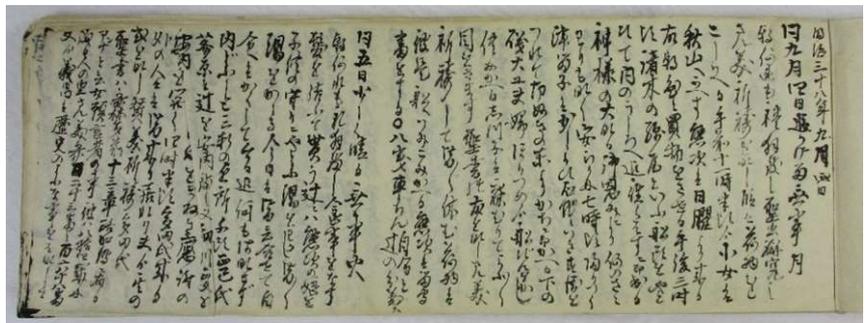
梶日記には、同年二月に高知市八軒町へ二週間ほど滞在した記録がある<sup>三六</sup>。その間の記録から推測するに、新たな別邸の場所は正しくは八軒町（のちの本町三丁目・鷹匠町一丁目）であったとみられる。なお、梶は明治三六年四月から大正二年末まで生活拠点をこの別邸に移している<sup>三七</sup>ので、梶日記参照の際には注意されたい。

### 四 梶日記を記した頻度

梶は、梶日記をどのくらいの頻度で記録していたのか。毎日であったのか、それとも数日分まとめてであったのか。これは、記録内容の精度にも関わる重要な視点である。

梶日記には、「日記」、「手帖（帳）」、「帖（帖めん）」をそれぞれ記したことが記録されている。これらは、「手帖を書きし日記をつける」<sup>三五</sup>「日記を付ける帖をもつける」<sup>三六</sup>との記述から、いずれも別物であることがわかる。

まず「日記」については、梶が自ら「日記」という単語を含む標題<sup>三七</sup>をつけた資料が梶日記のみであることから、まさに梶日記のことであろう。「手帖（帳）」は、購入記録がある<sup>三八</sup>ことと、キリスト教関係の記録を行っている



【写真四】細川梶日記（細川家資料 B-6-17）より

【表】梶日記で「日記」を記したとの記述がある日（○印）

明治38年		明治40年		大正3年	
1月1日～1月31日		7月1日～7月31日		6月1日～6月30日	
1月1日		7月1日		6月1日	
1月2日		7月2日	○	6月2日	○
1月3日		7月3日		6月3日	○
1月4日		7月4日		6月4日	○
1月5日		7月5日		6月5日	○
1月6日		7月6日		6月6日	○
1月7日		7月7日		6月7日	
1月8日		7月8日		6月8日	○
1月9日	○	7月9日		6月9日	
1月10日		7月10日		6月10日	○
1月11日	○	7月11日		6月11日	○
1月12日		7月12日		6月12日	○
1月13日		7月13日		6月13日	○
1月14日		7月14日		6月14日	
1月15日		7月15日	○	6月15日	
1月16日		7月16日		6月16日	○
1月17日		7月17日		6月17日	○
1月18日		7月18日	○	6月18日	○
1月19日	○	7月19日		6月19日	○
1月20日		7月20日		6月20日	○
1月21日	○	7月21日		6月21日	○
1月22日		7月22日		6月22日	○
1月23日	○	7月23日		6月23日	○
1月24日		7月24日		6月24日	○
1月25日		7月25日	○	6月25日	○
1月26日		7月26日	○	6月26日	○
1月27日	○	7月27日		6月27日	○
1月28日	○	7月28日	○	6月28日	○
1月29日		7月29日	○	6月29日	○
1月30日	○	7月30日	○	6月30日	○
1月31日	○	7月31日			

る<sup>三九</sup>場合が多いことから、市販の手帳に記された「教会日記」のことを指していると考えられる。また「帖（帖めん）」は、梶日記以外で自家製の和紙帳を使った記録簿（主として出納記録関係）のことと推察できる。

ここでは、梶日記における「日記」に関する記述をみていく。明治二八年一二月から明治三七年においては、「日記を書き移す」<sup>三〇</sup>、「日記を移つす」<sup>三一</sup>、「日記を移して仕舞」<sup>三二</sup>、「日記をつける」<sup>三三</sup>、「日記もつける」<sup>三四</sup>の五件のみである。ところが、明治三八年以降は高い頻度で「日記」を記したという記述がみられるようになる（【表】参照）。おそらく、明治一八年の時点で、何らかの理由により「日記」を記したことを記録する必要に駆られたのであろう。梶は数日に一度のペースで日記を記していたと考えられる。

また、梶は、「日記を「移」したり「つけ直」したり<sup>三五</sup>もしている。例えば明治三八年九月四日から九月九日までの期間は重複して二冊の梶日記に記されている<sup>三六</sup>が、九月一四日に「よふよふ日記を移して済」との記述がある<sup>三七</sup>ため、該当の期間の記録はこの日に書き「移」されたと考えてよい。しか

し、双方の記入内容を比較したところ、文章、内容ともに大幅な修正が施されており、一般にいう「書き写し」とはとても言い難い<sup>三六</sup>。また、梶の几帳面な性格を鑑みれば、下書き用の日記帳の存在も否定できない。

## 梶日記の解読にあたって

### 一 梶日記の解読方法

田中祐介氏は、史料としての日記を読み解くための方法を二通り紹介している<sup>三九</sup>。一つには、一人の日記を時系列に読み深める「つづけ読み」(通読)であり、もう一つの方法は、同時期に綴られた複数の書き手の日記を比較検証しながら読む「ならべ読み」(併読)である。細川家資料には梶以外による日記も伝わっており、後者の方法での検証も可能であるが、本稿執筆にあたっては、梶日記自体の特色や内容を整理する目的から「つづけ読み」(通読)を採用した。

解読時の参考資料としては、細川家資料のうち細川家の女性に関する資料(書簡・はがき・雑記・書籍等)<sup>四〇</sup>を適宜参照した。また、主要参考文献として、中沢静が細川家について書いた自家本『無一老人 細川義昌をめぐりて』を挙げておきたい。

この『無一老人』の内容については、静自身が次のように説明している。

私は義昌の社会での活動を具体的に知りません。しかしそれは資料によってある程度研究する事は出来ます。私は他人の知らない、うちなる義昌を、孫の見た義昌、母や祖母から聞いた義昌を日常茶飯事を含めて書き、故人の一面を御紹介する事になりました。(中略)義昌をめぐる亡き人々の事を書き加えて私が生きた形見ともさせて頂きました。<sup>四一</sup>

細川家別邸(八軒町)の北側、小川を挟んで向かい側(中島町)には、静を含む津留一家の住宅があった。両家は、細川家が大正三年に本宅へ引き上げるまでの間、日々の食事や礼拝をともしにするなど親しく過ごしていたという<sup>四二</sup>。細川家が八軒町に別邸を移した明治三六年当時、静は満一歳である。

梶日記には、梶が静の守りをしている記録が散見され、津留の二女誕生<sup>四三</sup>以降はさらにその頻度は高まる。

『無一老人』には、静が両邸を往来しながら経験した細川家との日常が綴られているほか、「聖書の友」や「おちち」<sup>四四</sup>の時間など、梶日記に登場する細川家独自の習慣についても紹介されている。こうした細川家の内部事情を知り得ているのは、まさに静自身が女性であり、梶や千鶴、雅等、家庭を中心に生活していた細川家の女性らと多くの経験や時間を共有していたためである。『無一老人』は、細川家の女性資料を解読する上で必読の文献といえよう。

### 二 梶日記の概要

『無一老人』では、曾孫の静からみた梶の日常生活が、次のように紹介されている。

梶の生活は非常に時間的で、家族は梶の行動にあわせて生活しておりました。夏は四時半頃にはもう起きて、着替えをすませると襦袢がけで自分の花畑へ出ました。「善馬善馬」と器用な義昌を腰使いにして耕したり、肥料をやったり、竹を立てたり、こうした合作の花畑は春秋をかざって実に美<sup>四五</sup>事でありました。／梶は朝の畑仕事がすみますと井戸端で洗面するのです。熱いお湯を金だらいへ入れるなど女中が手伝っていました。／お茶の間へかけ上りますと、祖父母が食卓の前にそろって待っていました。梶を加えて全部座りますと、朝食前の礼拝です。幼児がよく知っている賛美歌が誰ともなく流れて来ます。／次に義昌がさわやかな朝の祈禱を捧げ終りますと、「いただきます」とお箸を取ります。／梶の日課は朝食がすむと自分の部屋で、聖書を読み、讚美歌をうたって祈禱をします。それから新聞を見、十時に千鶴が熱い牛乳を運んできました。千鶴は「おちちでございます」と言った事を思い出します。それから「おくし上げ」となります。<sup>四五</sup>

【資料三】は、現存の梶日記(日曜日の記述を除く)のうち最も古い日記(A…明治二八年二月二一日)、最も新しい日記(C…大正三年七月三一

日)、AとCのおおよそ中間の日記(B・明治三七年五月二五日)を列記したものである。梶の生活が「非常に時間的」かつ規則的であったことは、これら記述にもよく表れている。

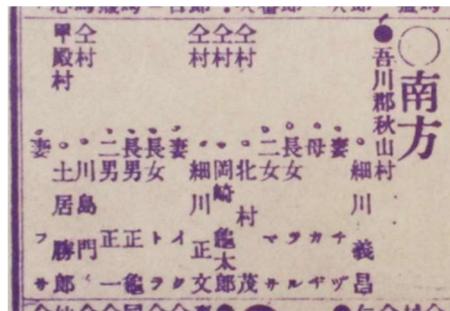
また、梶は、日記に記す内容をほとんど定番化していたと言ってよい。毎日のように記されているのは、キリスト教徒としての日課や交流、出納記録、家族の動向、家事、養蚕や自家栽培など家の中で行っている仕事についてである。次項からは、梶日記の内容を大まかに分類し、それぞれ解説していく。

## 一 キリスト教徒として

梶は、入信以降、大変熱心なキリスト教徒であった。入信の詳しい経緯や時期は不明であるが、『無一老人』には受洗記念に秋山本宅で撮影された家族写真が掲載され、かつ「明治一八年四月」と記されている<sup>四六</sup>。このことが確かであれば、梶は、義昌が執事(のちに長老)を務めた高知教会の設立一か月前に入信したことになる<sup>四七</sup>。

なお、明治二二年に作成された「高知教会信徒姓名表」において、確かに細川家の女性全員の名前が確認できた(【写真五】)。高知教会設立から間もない時期、一家全員が既にキリスト教徒であったことは間違いない。

【資料四】は、受洗から間もない明治一九年四・五月の義昌の日記から、一家の信仰の様子がわかる記述を抽出したものである。当時義昌は高知県会常置委員を務めるなど多忙な日々を送っていたが、記録によると、市外へ出向いて伝道活動を行うなど、高知教会執事としての務めを果たしている。また「母堂」(梶)や千鶴も頻繁に教会へ出向いていたことがわかる。なお、この頃の義昌は唐人町の別邸に滞在することもあったが、梶をはじめ細川家の女性たちの生活拠点は、未だ秋山村であった<sup>四八</sup>。梶は当時五九歳である。



【写真五】高知教会信徒姓名表(部分)  
明治22年/高知市立自由民権記念館蔵

当時既に片目を失明していたとするならば<sup>四九</sup>、高知市内への頻繁な移動は大きな負担を伴うものであっただろう。

梶の信仰心の高さは梶日記にもよく表れている。毎朝、礼拝し、聖書を読み、「聖書研究」し、讚美歌<sup>五〇</sup>を歌い、祈禱する。そして家族全員で「聖書の友」を行う。夜も、讚美歌を歌い、祈禱し、就寝する。この一連の日課を毎日欠かさず記録しているのである。さらにその記録は、晩年になるにつれてより詳細になっていく。

梶は、こうした一連の日課を、いわゆる定型文として記入していたわけではない。「義昌須崎よりかへる 聖書の友は其まへになす」<sup>五一</sup>「聖書研究しさん美祈禱をする 是はまちがい夜分する」<sup>五二</sup>「聖書の友をなしさん美祈禱して皆休む 研究は昼の中にする」<sup>五三</sup>といった記述からわかるように、実際に行った時間を思い出しながら、あるいは実際に行ったということを確認しながら、記録しているのである。

なお「聖書の友」とは細川家独自の日課である<sup>五四</sup>。家族全員が客間に集まって礼拝し、讚美歌を歌った後には、義昌による聖書講義もあったようだ<sup>五五</sup>。また、この「聖書の友」の時間は一定でない。梶日記によると、一日の中で家族全員が集合できるタイミングを見計らって行われていたようである。

次に、梶と高知教会関係者との交際関係についてである。梶は、日曜礼拝だけでなく、各種祈禱会や聖書研究会等、高知教会関係者が主催する集会へ積極的に出席している。そのため、梶日記には、幅広くさまざまな関係者との交流がみえるのである。

例えば、高知県におけるプロテスタントの伝道を初めて行ったアッキンソン<sup>五六</sup>をはじめ、フルベツキ<sup>五七</sup>、マキルエン<sup>五八</sup>等、梶日記には外国人宣教師の名前が頻繁に登場している。中でも、明治三四年に高知女学会(現在の清和女子中等学校)を設立したアンニー・ダウドとの交流は、公私ともに深いものであった。なお、彼らと梶との交流の場に義昌はほとんど現れない。梶は、自らの意思で、自らの名前をもって彼らと交流していたといえる。

また、当然ながら高知教会の女性信徒との交流も活発である。梶日記には、老婦人会のメンバーを中心に、初期高知教会の教師をつとめた女性民権家としても活動した山崎(織田)竹<sup>五九</sup>や、事実上の指導者であった<sup>六〇</sup>片岡健吉の妻・美遊のことであろう「片岡姉」も登場する<sup>六一</sup>。梶日記に記された女性信徒同

士の交流は、教会活動にとどまらない。冠婚葬祭をはじめ、各家の食事会や宿泊会、信徒家族の見舞や介抱、物々交換など、互いの私生活にまで及んでいるのである。

さらに、梶日記には、彼女たちが参加していた婦人会活動に関する記録も散見される。昭和時代後期に高知教会長老を務めた木下スガ氏は、『高知教会百年史』にて、明治時代における高知教会の婦人会活動の社会的役割をこう紹介している。

明治の中期頃の高知で、社会活動の中で指導的な役割を果たしたのは、主として教会婦人たちであった。彼女らは当時としては画期的な事業の一つとして高知慈善会を起し、組織的な運動を各地に拡めていった。更に学校経営にも手を染め、貧しい家庭の子女たちに勉学の門戸を開放し、婦人らしいこまやかな心くばりをしながらよい奉仕をした。<sup>六二</sup>

明治期の女性たちは、夫を支え子を育てる「良妻賢母」の役割が絶対的に求められていた。こうした婦人会の活動は、「教会婦人」たちにとって、社会に参加する貴重な機会となっていたのではないだろうか。

なお、前述のとおり、梶は五八歳でキリスト教徒となった。義理の両親と夫は既に亡くなっており、子育ても終えた状態である。つまり、梶は一日におけるほとんどの時間を自分で自由に使うことができる女性であった。高知教会の婦人会活動は、梶のような女性だけが参加していたのだろうか。

高知教会は、戦災によって多くの資料を失っており、明治期の婦人会の様子についてもほとんど不明であるという<sup>六三</sup>。しかし梶日記によると、梶が所属する「老婦人会」<sup>六四</sup>以外にも「婦人会」「婦人仕事会」「婦人連合会」<sup>六五</sup>等、様々な婦人会が存在していた。また明治三六年頃からは女性信徒たちによる「慈善市」<sup>六六</sup>（いわゆるバザー）が頻繁に開催されており、結婚後の雅が参加したという記録もある<sup>六七</sup>。梶より若い若い世代の女性たちも、活動に専念とまではいかずとも、各々できる範囲で関わっていたと推測できるのである。

また、高知教会の牧師であり梶日記にも頻繁に登場する多田素は、婦人会についてこう述べている。

殊に婦人会の如きは教会においては実に侮ることのできない勢力であつて、礼拝に出席する会衆を見ても婦人が断然多数を占めており、男子に比して婦人が遙かに礼拝を守ることに忠実である。一些事に徴しても、教会というもの否むしる教会の発展拡大とも言うべきものは、原始的キリスト教の時代より今日に至るまで、女性の活動に負うところ甚だ大なりと言うべきである。<sup>六八</sup>

筆者も、梶日記を通読するなかで多田の指摘と同様の感想を抱いた。細川家の女性たちは、日曜日（安息日）の礼拝をはじめとする教会の定例的な行事について、基本的に欠かさず参加している。しかし義昌は、仕事の多忙さゆえ参加できなかった日が目立つのである。

このように、梶日記には、明治期の女性信徒らの婦人会活動の様子や日々の交流が詳細に記されている。こうした記録をみていくと、高知教会の活動はむしろ女性信徒によって支えられていたように思えるのである<sup>六九</sup>。

## 二 出納記録

梶日記には、日々の金銭授受の記録が豊富に含まれており、そこからは細川家の家計事情がみえてくる。なお【資料五】は、梶が本宅と別邸を行き来した一か月間の出納を一例としてまとめたものである。

梶は、義昌から定期的に「遣ひ銭」を受け取っていた。梶日記によれば、梶はこの「遣ひ銭」を、生活品や贈り物の購入、梶名義の伝道金や寄付金の支払いなど、梶の個人的な支出に充てている。また、家族の共有物を購入する際には、梶の「遣ひ銭」で支払った場合は「是は自分の銭にて買ふ」<sup>七〇</sup>。「おかげ分にて拂」<sup>七一</sup>、千鶴や雅が支払った場合は「お千鶴より出し拂」<sup>七二</sup>。「お雅より拂」<sup>七三</sup>等と、支払人が明記されている。さらに、これとは別に「内」のお金から支出したという記録<sup>七四</sup>もみられる。つまり、細川家の女性たちは、家の金銭とは別に各々「遣ひ銭」を所有しており、それを自分の判断で使うことができている、ということになる。

余談であるが、細川家の金銭管理に対する考え方が垣間見える興味深い資

料がある。明治三七年、東京帝国大学法科大学（現在の東京大学法学部）在学中の義昌が、父親である義昌に、友人と一緒に読むための新聞を送ってほしいと依頼した際のことである。義昌は、義方に書簡で次のように回答している。

扱新聞之段被申越相送り候事ハ至テ安之事ニ御座候然ル四五名も新聞ヲ見度者居候之由左レバ共ニ見る処の四五名ト相談シ義方ハ新聞を出ス事トシ就テハ他の者より郵便料丈ケ割当テ出ス様ニ被成度少シノ事なれども從テの事其様被致度新聞も郵便料皆々手許より他の者は只で見ると云ふよふなる事は道理ニ欠けたる事なれば他の者より夫れ丈ケ出ストスルモ彼等ハ余程徳なるべし七五

さらに義昌は、新聞を読む者が五人いるならば一人一厘ずつ集金し、五厘分の郵便切手を高知へ送るよう指示した。本家を継ぐ息子に対しては、些細な金額であってもその扱いについて厳しく指導していたようである。

梶日記に話を戻そう。梶は、金銭授受だけでなく物の授受についても詳細に記している。静によると、細川家では他人から貰った物は「家族の誰が頂いた物でも、全部梶に持つていく事になってい」た七六。さらに、貰った物はすべて梶の押入れで管理され、千鶴すらも自由に取り出すことができなかった七七という。つまり梶日記には、細川家が貰った物が一通り記録されていると推測でき、そこからは細川家の交際関係をもみてとることができるのである。

### 三 家族の動向

梶は、家族の動向についても日々欠かさず記録している。外出の機会が多い義昌だけでなく、基本的に家庭の中で生活をしている千鶴や雅についても、その行動内容が記される。ここでは一例として、明治三五年のある日七八の日記を紹介する。傍線部分が家族の動向に関する記述である。

四月一日雨天無事木曜

朝何れも礼拝致し子供等は

皆休ミおからは不行義昌は

県会へ出る森澤氏へ義徳より

産衣と茶を送る義方ニ持せ

遣る肴は得上ず高城町女学校へ

鳥渡行くかへりに小山へ立寄る

お千鶴は楠氏へ行先先生ハ今日も

おいしやの大会にて得見てもらはず

代しんの人ニ見て貰らい薬ヲ取る

おからは不行杉姉に京菓子箱入

二十五銭位を貰らう秋山より

白米四俵ト重と玉子醬油を

熊次の便りニおこす高知のうんちん

に八銭相渡す夜るせい書の友をして

祈祷して休す七九

また、家族が遠方に長期滞在している際には、滞在先から書簡や葉書が届いたことも記される。ときには「無事のよし安心する」八〇等と梶の安堵の思いが添えられることもある。

なお、こうした記録の中に、義昌をはじめとする家族の仕事や学業の状況を把握できるような記述はほとんど見られない。梶はあくまで、家族の所在と無事を書き留めていたに過ぎないのである。

### 四 家事

梶日記は女性による記録であるため、当然ながら家事に関する記述が数多く登場する。また、梶以外が行った家事についても記されており、細川家における家事分担をみることもできる。ここでは特に炊事と洗濯についての記述を紹介する。

## ア 炊事

日々の献立等、梶日記において日常的な炊事の記録は確認できない。したがって、細川家の炊事は、基本的に千鶴と女中が行っていたとみられる。時折、単発的に「しよぶがを煮」<sup>八二</sup>た等という記述も見られるが、梶が自分の体調のため個人的に作った場合がほとんどである。

なお、正月や記念日等、客をもてなす大きな行事については、献立や役割分担を記している場合もある。また、近所の女性を雇うなどして大勢で炊事の対応をしたとの記録もある<sup>八二</sup>。

## イ 洗濯

梶日記では「せんだく」等と表記される。時々「せんだくや」へ依頼することもあった<sup>八三</sup>ようだが、基本的には、梶、千鶴、雅、女中が、いずれも六月から十月の晴れた日に行っている。また「のりかいせんだく」<sup>八四</sup>を行った日もある。これは糊物の洗濯のことと思われるが、ただの「せんだく」と表記しないところに「のりかいせんだく」の煩雑さを感じさせる。

なお、一月に「せんだくしやほん」を購入した記録がある<sup>八五</sup>ことから、梶日記における「せんだく」は、「せんだくしやほん」を使うような日常的な洗濯ではなく、布団や着物等を洗う大掛かりな洗濯を意味しているであろう。

## 五 仕事

細川家の女性たちは、女中や「日よふ」<sup>八六</sup>とともに日々の家事をこなしていた。しかし、梶日記によれば彼女たちの仕事はそれだけではなかった。自家で養蚕を営んだり、自宅のそばに構えた畑で栽培した野菜等を販売したりするなどして、利益を得ているのである。なお、こうした仕事で得た利益を細川家全体の収入としていたのか、各々「遣ひ銭」の足しにしていたのかは不明である。

以下、参考として梶日記における養蚕と自家栽培に関する記録を一部引用する。

## ア 養蚕に関する記録（明治三五年五月二〇日から六月四日まで<sup>八七</sup>）

どふも中岡氏より貰ひしかい子もづる／＼二成りほそき分は猶ぢこまる由今日少しおくれの分をながす（五月二〇日）桑の中へ土を入れる（五月二一日）新宅のねへさんうしろの桑をかり中岡氏へ売るよし（五月二二日）後ろの畑の薪より中岡氏へうりし桑は〇拾七目有りよし（五月二三日）今日又々おそきかいこを少し新宅よりわけて貰らう／＼下の楠馬殿二桑をこいてうる代かけ目十二位有よし百目七錢五りのよし（五月二七日）今日も桑をうる二つき夜ぶん桑をこく四〇九百五十目有よし（五月二八日）かい子のゆきをあづかる（五月二九日）夜分お梶は少しつゝをまく（五月三〇日）今日熊次来りてうしろの畑を打こしかへる是は桑の中也／＼熊次嫁に二番の蚕を遣る（六月二日）今日もまた熊次来りて桑畑を打小女てつだいヲする（六月三日）当夜まゆをはぐ木口式升位分（六月四日）

## イ 自家栽培に関する記録（明治三八年六月一日から六月一七日まで<sup>八八</sup>）

ぼふふら<sup>八九</sup>の棚を少しこしらへる／＼少女はしよぶがを植る／＼畑の草を引きてとふがんをうへる（六月一日）ぼふふらのたなをよふ／＼こしらへあける／＼ぼふふらと唐かんを植て水をかける少女はんにくを引く（六月二日）市へ行〇三銭なすなへを買ふ（六月七日）夕方花やぼふふらへこえをする（六月八日）西のぼふふらのたなをこしらへる大に草臥れる（六月一二日）花畑の草を引唐かんを植る（六月一三日）花のたおれたるをおこし（六月一四日）草を引きまめをおこしたてそへをする笹を田いもへ入れる（六月一六日）よふ／＼少しあからみえんどふを引夫を二人してもる（六月一七日）

なお、こうした仕事は、秋山村の本宅においてだけでなく、別邸に拠点を移した後も引き続き行われている。同家における重要な収入源であったと考えられるのである。

## 六 日露戦争と銃後活動

梶日記には、日露戦争時の銃後活動に関する記録が散見される。女性の日常と戦争がどのような経緯で結びついていったのか、その実態をみることでできる貴重な記録といえよう。

日清・日露戦争期の中心的な軍事後援団体である「愛国婦人会」の名が梶日記に初めて登場するのは、明治三十五年五月三日のことである。「愛国婦人の大会に付此所にて甲殿嶋田姉親子と供に其集りをなしてお梶司会を勤む」<sup>九〇</sup>。秋山村にて、大会に関する祈祷会を開催した記録である。

それから三年後、梶は、「こふえんにて愛国婦人会のはつかいせつの処へ見物」<sup>九一</sup>に行っている。これは、高知公園（三ノ丸）で行われた愛国婦人会高知支部の発会式のことであろう。その様子を報じた記事<sup>九二</sup>によれば、この発会式は「谷子爵、山内豊静君、県知事以下各高等官」など来賓二、五〇〇余人が出席した大規模なもので、「見物人非常に多く中々の盛会」であった<sup>九三</sup>。梶はそんな式の見物人の一人であったのだが、梶日記では、式の内容や会場の様子は一切語られていない。式の余興として行われた「のふの舞を見物してかへる面白く鉢の木を見る」とだけ記している。

しかし、梶は愛国婦人会の活動に一切興味を持たなかったわけではない。発会式から一か月後の五月一日、梶は、高知教会老婦人会のメンバーであり友人でもある孕石氏を尋ね、愛国婦人会への加入を相談した<sup>九四</sup>。それから一〇日後の日記には「今日愛国婦人会本分<sup>九五</sup>より色々な物来り受取る又札も来るなり」<sup>九五</sup>と記されている。そして、九月二三日の日記には、高知公園で行われた軍人等一四人の葬式に「はじめて愛国婦人会のしるしを付て行夫よりかへりて大だれに御座候」<sup>九六</sup>。梶は確かに愛国婦人会の会員となっていた。なお、梶は愛国婦人会に入会する前から銃後活動に関わっている。以下、日露戦争中の梶日記から関係する内容を時系列順に紹介する<sup>九七</sup>。

しづ子をつれて升形へ往く今日は軍人のいこつ汽船にて着致し候由ニ付参る（明治三十七年一〇月六日）此西二居られる田所氏来られ軍人ニケツトを送る為其せわを頼まれし由にて来るケツトのなき人は金にて出ス由壹枚五拾銭のわり合にして壹枚以上を出だすはずのよし（一一月六日）今日

辻の二三軒東の人出兵につき町内一同より送物として金五拾銭づゝ出ス約束の由中ニは一円出ス者も有るよし又不ラフも出来居らざりし故此度之をこしらへるニ付合せて七十銭出しくれへとの事を申来る（一一月九日）雅子は市の婦人会へ軍人へ出ス袋物を少し出さんとして夫れをこしらへる（一二月二六日）軍人へちらしの本をかすく袋入れにして教会婦人会として名前の中へ入れて雅子と供ニ五袋づゝ十袋織田姉へ迄差出す（明治三十八年一月九日）軍人の送り物のわり〇弍銭五厘出ス（一月一五日）先日軍人へ出したる金の不足致居候由ニ付又〇二銭出ス（一月二二日）軍人の御出船を見立ニ行く（三月七日）柳原の軍人の墓地を見ニ栄衛さんと供ニ往く（三月二二日）婦人祈祷会を開き司会を勤める口の事に付てはなす（四月一六日）〇拾銭こちよふ丸〇拾銭手帖合六拾壹銭五りを袋へ入れて海軍祝勝に付武陽協へ出スはずにて之をこしらへる木綿ハ内二切有りて夫にてこしらへる（六月一四日）其祝勝袋へ夫々いれて名前を入れて津留子ニ頼む之を武陽協へ出スよし一所二たのむ（六月一五日）今日軍人ニして口国へ取りこに成り居る人々へ送る由ニ付片岡姉より集められるニ付〇金式拾銭めぐみ金の内より出して国吉姉に相渡ス（六月二二日）

また、梶は、その戦況についても関心があつたようである。日露戦争に関する新聞号外が届いた日の日記には「ゴラガイ」「こふかい」等と記し、率直な感想を綴っている。「今日こふがい来るどふか〇〇〇占領したる由大ニ悦こぶ万歳」<sup>九八</sup>と記した日もあれば、「今日もゴラガイ来る二十六七日の戦には凡そ死々ヨヲ者は二千人位有よし大ニいたむ」<sup>九九</sup>日もあつた。また、明治三十八年六月には「今日は嬉しき日也平和のごふがい来る」<sup>一〇〇</sup>、「今日こふがい来る露国との講利成るよし大ニ歡ひニむかふ」<sup>一〇一</sup>とある。終戦三か月前、両国の講和交渉が決定した直後の記録である。

## おわりに

これまで紹介したとおり、梶日記は、その日の行動や出来事を淡々と記したものであり、梶の個人的な思いが語られることはほとんどない。しかし、

明治三六年には異例ともいえる感情的な記述がみられる。

扱今日も小女の事よりして大あらしいをする夫れは自分のつめを右の手の分をつんで貰い居りし時はなしに少女は（機）大分はたが上手二なつた只彼二仕入をしてやつたよふな物ぢや又今年くるがもどのよふな者やらしれん只手をつけて遣るとじやといふてえらい一〇彼をおしむよふ聞へる故に夫程（それ）おしいものなれハなぜいなす一〇ぞわしハこらへるぞよどふともできつろふ一〇二にのふというとき顔色をかへて夫は今そふ云てもできませんと云故夫はいぜんの事よのと云と其時ニハまだそれ程上手二なつて居らんといふよりして親子どふこふ大あらしいをなす実二年寄てむつかしく成り嫁（備）二もにくままるゝことよ（中略）おまへさんがきにいらぬ者ハおく事ハいかんではないかと夫故今年おく事を自分できめて約束をして居り乍私のむかふてやはり其様成事を云はさためし自分ハおきとふてたまらん故其様成事毎も持出す事と私は考がへる故にかんにんがでさずそふ／＼うるさいを得一〇五こらへずなるなり一〇六

「小女」とは、細川家の女中のことである。前述のとおり、細川家では女中を雇って家事を手伝わせていた。梶日記によると、長年雇っている決まった女中がいたわけではなく、未婚の若い女性を親族や友人の紹介で雇っていたようである。「大あらしい」をした「親子」は、文脈から想像するに梶と千鶴のことである。一人の女中を長く雇いたい千鶴と、「実に年寄てむつかしく成」つたと自覚している梶のやりとりが、方言を交えた会話形式で記されている。なお、この日記は梶日記のなかで最も長文である。

筆者は、梶日記を通読するなかで、梶は何を目的に日記を書いていたのか、という素朴な疑問を抱いた。梶日記には家族の動向など細川家全体の事情も多分に含まれているため、梶が一家の記録として遺したもの、という解釈も可能であろう。しかし、こうした感情的な記述を見れば、家族に読まれることを前提にしていることは明らかである。

家資料の保存及び取舍選択には、当然、当主の考えが色濃く反映される。細川家資料は義昌の徹底的な文書管理によって現代に伝えられたと指摘されるが一〇、義昌は生前、大量の新聞と自身の日記を蔵に保存しているのは

自伝執筆のためだと語っている一〇八。

また、静は、同家における日記の保存やその扱いについて次のように述べている。

二人一〇九は毎年毛筆で書いていたが、日記の性質上読んだ事はなかった。時々虫干しの手伝いをさせられたが、義昌は父の日記帳をあかず読んでいた事がある。誰にもある事で背中を丸くして読みふけていたが、朝早くから出して三時頃には仕末したので、その間の時間であった。一一〇

静は、「日記の性質」（日記が個人的な記録であること）を認識していた。そのため、義昌が義郷の日記を「読みふけ」る姿をこのように印象的に語ったのであろう。つまり、細川家では互いの日記を読み合う習慣はなかったと考えられる。

また、虫干しというまでもなく長期保存を視野に入れたものである。梶日記にも八月から九月の晴れた日に「帖」や「本」を外に干したという記述が散見される一一が、これらが静のいう「虫干し」にあたるものとするならば、干していた「帖」には梶や義昌の日記帳が含まれていたということになる。

一般に、従来の「歴史の書き手」は圧倒的に男性であった。梶日記のような、日常生活に関する女性史料が伝わってこなかったのは、「歴史の書き手」側、つまり史料を遺し伝える側の人間に、女性も歴史を作る上での行為主体であるという視点が欠けていたからだという指摘もある一二。生前の義昌が梶日記をどのように位置付け、どこまで意識的に保存していたかはわからない。しかし、その後の細川家においても梶日記は処分されることなく、現在まで伝わっているのである。

最後に、梶日記をはじめ貴重な資料を遺し伝えてくださった細川家に感謝と敬意を表し、本稿を終えたい。

（はまだみゆ 高知市立自由民権記念館学芸員）

【注釈】

- 一 渡部淳「細川家資料解題」『細川家資料目録』、高知市立自由民権記念館、一九九六年、四頁。
- 二 中沢静『無一老人』、自家本、一九七九年、一一一頁。
- 三 小林和香「島村右馬丞日記にみる結婚と離婚」『王佐史談』二二七号、二〇〇四年、三四頁。小林氏によると、梶は嘉永二年二月に義郷と結婚し同年一月に伝太郎（義昌）を出産したが、二年後に一度離別した。その後帰縁したものの、義郷の日記からは梶が義郷との生活にいさかカストレスを感じていたことが推察できるといふ（同上、三五頁）。
- 四 中沢、前掲書、一七五頁。
- 五 同上、五頁。
- 六 同上、四四頁。
- 七 細川梶日記（細川家資料 B-6-8）、明治三六年二月八日等。各種祈祷会の司会は、婦人会の女性における輪番制で行っていたようである。
- 八 「秋山講義所」は、梶日記では「教会講義所」「講義所」という名称で、明治三五、三六年の記録に頻出する。
- 九 同上、一一九頁。
- 一〇 同上、一二二―一二三頁。
- 一一 同上、一二四頁。
- 一二 同上、一二七頁。
- 一三 同上、一一一頁。
- 一四 同上、一一一―一二二頁。
- 一五 同上、一一三頁。
- 一六 細川雅日記（細川家資料 B-11-1）、明治四四年二月一〇日。
- 一七 細川梶日記（細川家資料 B-6-15）、明治三八年五月一、二日等。梶が老婦人祈祷会の集金を扱っている旨の記述がみられる。
- 一八 設立初期の高知教会において執事を務めていた門田真心のこととみられる。
- 一九 細川梶日記（細川家資料 B-6-15）、明治三八年一月二九日。
- 二〇 中沢、前掲書、八頁。
- 二一 実際、一〇月に日記帳を作ったという記述がある（細川家資料 B-6-19 明治四〇年一〇月一九日）。
- 二二 中沢、前掲書、五一頁。
- 二三 同上、九八頁。
- 二四 細川梶日記（細川家資料 B-6-8）、明治三六年二月三日から二月一六日。
- 二五 細川梶日記（細川家資料 B-6-15）、明治三八年二月二〇日。
- 二六 細川梶日記（細川家資料 B-6-19）、明治四〇年七月二日。
- 二七 「日記おぼへ帳」、「明治卅五年日記」、「万日記おぼへ帳」等。詳細は【資料二】参照。
- 二八 細川梶日記（細川家資料 B-6-19）、明治四〇年八月二日等。
- 二九 細川梶日記（細川家資料 B-6-9）、明治三六年四月二六日等。
- 三〇 細川梶日記（細川家資料 B-6-7）、明治三五年一月七日。
- 三一 細川梶日記（細川家資料 B-6-8）、明治三六年二月一七日。
- 三二 同上、明治三六年二月一九日。
- 三三 同上、明治三六年三月一四日。
- 三四 細川梶日記（細川家資料 B-6-14）、明治三七年一月一三日。
- 三五 細川梶日記（細川家資料 B-6-15）、明治三八年三月三日等。
- 三六 細川梶日記（細川家資料 B-6）のうち 16 と 17 の二冊に記されている。
- 三七 細川梶日記（細川家資料 B-6-17）、明治三八年九月一四日。
- 三八 例えば、九月四日は一家で秋山村の本宅へ帰した日であるが、義昌が「船ちゃん」を支払ったことや、乗船中に雨が降りはじめ、二歳の娘を連れた津留が波に「おぢ」ていた（「おぢる」とは高知県の方言で「怖れる」という意味）ことは、書き「移」された方の日記には記されていない（細川家資料 B-6-16 明治三八年九月四日）。
- 三九 田中祐介「総論「日記文化」を掘り下げ、歴史を照射する」『無数のひとり』が紡ぐ歴史「日記文化から近現代日本を照射する」、株式会社文学通信、二〇二二年、三三三頁。
- 四〇 筆者が確認したところ、細川家資料には、約七五〇件の女性関係資料（女性が作

成したものの、女性に宛てられたもの)が含まれている。

四二 中沢、前掲書、「序にかえて」より。

四三 同上、一一四頁。

四四 同上、一七七頁。津留の二女、静の妹である寿衛は明治三十七年三月生まれである。

四四 梶日記には、「ちゝ屋」から「ちゝ」を購入したこと、「ちゝ」を始めたこと(明治二九年五月二三日、明治三九年八月二五日等)が記される。さらに「ちゝの行平」を購入している(明治三〇年六月七日)ことから、温めて飲まれていたことがわかる。当初筆者は「ちゝ」を乳幼児用と考えていたが、『無一老人』によって「ちゝ」を飲むことは梶自身の習慣であると判明した(中沢、前掲書、一一七頁)。

四五 中沢、前掲書、一一七―一一八頁より抜粋。

四六 同上、冒頭の写真集に掲載されている。

四七 高知教会百年史編纂委員会編『高知教会百年史』、日本基督教団高知教会、一九八五年、一八頁。なお、義昌の受洗時期については資料によって齟齬がある。同書では明治一八年(月日不明)にミロールより受洗したとの記録が紹介される(同上、二〇頁)が、『無一老人』には、明治一七年一月に受洗したと義昌本人から聞かされたとの記述がある(中沢、前掲書、四〇頁)。また、女性たちの受洗経緯については、管見の限り『無一老人』でしか確認できない。それによると、義昌に影響された梶がある日自ら「私も洗礼を受けたい」と申し出た。これに千鶴も同意を示し、津留と雅は親の責任のもとに受洗させることになったという(同上、四四頁)。

四八 一家が別邸に移り住んだのは明治二三年九月一日(中沢、前掲書、八六頁)。

四九 梶が片目を失明した時期は不明であるが、明治二八年から二九年までの梶日記には、目の調子が悪いために「黒岩氏」(眼科と思われる)の診察を受けたという記録が散見される。また、「りょう治」のため「黒岩氏」へ入院した時の記録もある(細川家資料B-6-3、明治二九年五月二二日から五月三一日まで)。

五〇 梶日記では、「さんみ」「さん美」と記される。

五一 細川梶日記(細川家資料 B-6-7)、明治三五年一〇月七日。

五二 細川梶日記(細川家資料 B-6-17)、明治三八年一〇月二三日。

五三 細川梶日記(細川家資料 B-6-19)、明治四〇年八月一日。

五四 中沢、前掲書、四三頁。「聖書の友」は明治一七年一〇月末から始まり、義昌が死去するまで続けられたという。

五五 同上、二〇一頁。

五六 梶日記では、「アツキンソン」と明治三八年を中心に複数回交流していることがわかる。

五七 明治二九年五月、細川家は「フルベツキ氏」を秋山村に招待し、お話会や親睦会を開いている(細川家資料 B-6-1 五月一三、一五日)。なお、静によると、明治一七年に義昌が洗礼を受けたのはフルベツキからだという(中沢、前掲書、四〇頁)。

五八 梶日記では「マキルウエン氏」「マクル氏」等と記され、梶日記全編に散見される。「マクル氏の奥さん」とは物々交換をしたり食事会をしたりするなど、私的交流もあったようである。

五九 細川梶日記(細川家資料 B-6-19)、明治四〇年九月一四日等。

六〇 高知教会百年史編纂委員会編、前掲書、四〇五頁。

六一 「片岡姉」は、主に明治三八年の梶日記において、銃後活動や慈善活動に関する記述のなかに複数回登場する。

六二 同上、四〇四頁。

六三 同上、四〇五頁。

六四 梶日記では、「老婦人組」「年寄組」等と記される。

六五 土佐教会と高知教会の連合婦人会。

六六 梶日記には「慈善市」「しせんみせ」等と記される。『高知教会百年史』では婦人会活動の一つに位置付けられている(四〇九頁)。

六七 細川梶日記(細川家資料 B-6-13)、明治三十七年六月二八日。

六八 多田素「牧会百話」日本キリスト団高知教会、一九六九年、一二九―一三〇頁。

六九 多田は昭和一六年に死去しているため、没後の発行である。

七〇 なお、『牧会百話』によると、多田は婦人たちが「慈善とか救済とか広範に互った種々なる社会事業」に関心をもち、行動することに対して強い懸念を抱いている。そして、仮にそれが「血みどろな真剣なもの」であっても、「教会に帰れ、教会を守れ」と言わざるを得ないと述べる。木下氏は、多田のこの姿勢について「高知教会の基本的姿勢を決定したと言ってよい」と指摘し、さらに多田のこうした

指導以降、婦人会の社会活動はほとんど行われなくなっていたと述べている  
〔高知教会百年史〕、四〇五―四〇六頁。

七〇 細川梶日記（細川家資料 B-6-4）、明治三五年三月五日。聖書一冊と「讀  
美歌」一冊の購入記録。

七一 細川梶日記（細川家資料 B-6-15）、明治三八年一月一日。塩三升の購  
入記録。

七二 細川梶日記（細川家資料 B-6-13）、明治三七年八月九日。秋山村から別  
邸までの「船ちゃん」支払記録。千鶴と梶が乗船した際のもの。

七三 細川梶日記（細川家資料 B-6-13）、明治三七年六月六日。しほ、はき物  
直し、大白、黒砂糖の支払記録。

七四 細川梶日記（細川家資料 B-6-13）、明治三七年七月二日。慈善市の取り  
まとめを行っている武市氏への支出記録。

七五 細川義方宛 細川義昌書簡（細川家資料 F-4-283）、明治三七年一〇月八  
日。傍線は筆者による。

七六 中沢、前掲書、一二〇頁。  
七七 同上、一二二頁。

七八 細川梶日記（細川家資料 B-6-4）、明治三〇年四月一日。  
七九 傍線は筆者による。なお「子供」とは津留・雅・義方のことであり、「おかち  
（お梶）」とは梶自身のことである。

八〇 細川梶日記（細川家資料 B-6-16）、明治三八年五月二二日。これは雅が  
フェリス和英女学校に進学した直後の記録である。

八一 細川梶日記（細川家資料 B-6-17）、明治三八年一月二二日。  
八二 例えば、細川梶日記（細川家資料 B-6-17）、明治三八年九月五、六日。

秋山村の本宅に多田牧師を招き「感謝の集り」を行った旨の記録である。祈祷後  
の親睦会では参加者に「善を出して御ちそふ」する際の「おきうじ<sup>（給仕）</sup>」のために新  
宅の女中や近所の女性を雇ったことが記されている。

八三 細川梶日記（細川家資料 B-6-9）、明治三六年五月九日等。

八四 細川梶日記（細川家資料 B-6-6）、明治三五年七月八日。

八五 細川梶日記（細川家資料 B-6-17）、明治三九年一月二五日。  
八六 「日雇い」の意。梶日記で頻出する。

八七 細川梶日記（細川家資料 B-6-6）より。

八八 細川梶日記（細川家資料 B-6-16）より。  
八九 高知県の方言で「かぼちゃ」のこと。

九〇 細川梶日記（細川家資料 B-6-6）、明治三五年五月三日。  
九一 細川梶日記（細川家資料 B-6-15）、明治三八年四月二三日。

九二 『土陽新聞』明治三八年四月二五日。  
九三 外崎光広氏は、この発会式について「天皇制国家のすべての権力機関の代表  
者を網羅したこの発会式は、まさに愛国婦人会の性格を象徴するものという  
ことができ」と評価している（外崎光広著『高知県婦人解放運動史』、株式  
会社ドメス出版、一九七五年、七八―七九頁）。

九四 細川梶日記（細川家資料 B-6-15）、明治三八年五月一日。

九五 細川梶日記（細川家資料 B-6-16）、明治三八年五月二日。

九六 細川梶日記（細川家資料 B-6-17）、明治三八年一〇月二三日。

九七 細川梶日記（細川家資料 B-6-14、16）より。

九八 細川梶日記（細川家資料 B-6-13）、明治三七年八月二四日。  
九九 同上、明治三七年八月三一日。

一〇〇 細川梶日記（細川家資料 B-6-16）、明治三八年六月一日。  
一〇一 細川梶日記（細川家資料 B-6-16）、明治三八年六月二日。

一〇二 「えらい」は、高知県の方言で「たいそう」「甚だ」の意味。  
一〇三 「いなす」は、高知県の方言で「帰らせる」の意味。

一〇四 「つるふ」（つるー）は、高知県の方言で「したであらう」の意味。  
一〇五 「得」は、高知県の方言で「〜することができない」を意味する副詞。

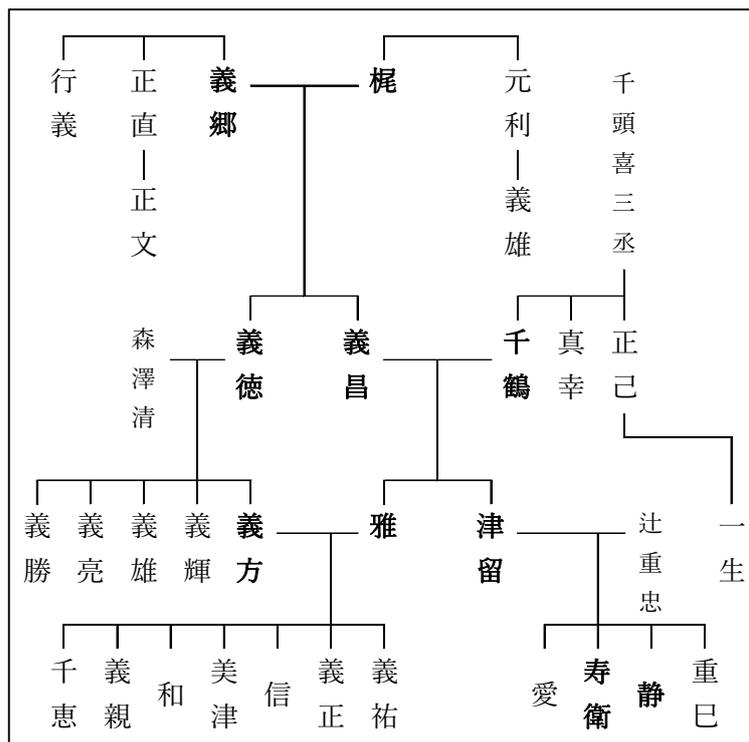
一〇六 細川梶日記（細川家資料 B-6-8）、明治三六年一月一六日。  
一〇七 渡部、前掲書、三頁。

一〇八 中沢、前掲書、一六五頁。  
一〇九 梶と義昌のこと。

一一〇 中沢、前掲書、八頁。

一一一 細川梶日記（細川家資料 B-6-6）、明治三五年九月一二日等。  
一一二 四方由美「宮崎における女性史資料保存に関する研究（1）」『宮崎公立大学人  
文学部紀要』第一七巻、第一号、二〇一〇年。

【資料一】細川家系図（近代）



注1：『無一老人』を参考に筆者が作成したものである。

注2：本稿に登場する人物を太字で示している。

【資料二】『細川家資料目録』における「B 個人日記・雑記」のうち「6 梶」一覧

資料番号	標題	年代	本稿における 梶日記
B-6-1	明治二十八年十二月二十一日ヨリ 日記おぼへ帳	明治28年12月21日～明治29年5月22日	○
B-6-2	(おぼへ帳)	明治29年～明治34年	×
B-6-3	明治廿九年五月ヨリ 万おぼへ帳	明治29年5月22日～5月31日	○
B-6-4	明治卅年三月一日ヨリ 日記おぼへ帳	明治30年3月1日～7月11日	○
B-6-5	色々おぼへ	明治31年9月5日～9月15日	×
B-6-6	明治卅五年日記	明治35年5月1日～9月30日	○
B-6-7	明治卅五年十月一日ヨリ 日記おぼへ帳	明治35年10月1日～明治36年1月2日	○
B-6-8	明治三十六年一月一日ヨリ 日記おぼへ帳	明治36年1月1日～4月2日	○
B-6-9	色々おぼへ帖	明治36年4月19日～7月3日	○
B-6-10	明治三十六年五月ヨリ 色々かいものおぼへ	明治36年5月2日～7月1日	×
B-6-11	明治三十六年七月四日ヨリ 日記色々おぼへ帳	明治36年7月4日～9月27日	○
B-6-12	明治三十八年 色々おぼへ	明治37年～大正3年	×
B-6-13	日記おぼへ帳	明治37年5月24日～9月14日	○
B-6-14	日記おぼへ帳	明治37年9月14日～12月31日	○
B-6-15	日記おぼへ帳	明治38年1月1日～5月15日	○
B-6-16	明治卅八年五月十六日より 日記おぼへ帳	明治38年5月16日～9月9日	○
B-6-17	明治三十八年九月十日ヨリ 日記おぼへ帳	明治38年9月4日～明治39年1月25日	○
B-6-18	明治三十九年八月二日ヨリ 日記おぼへ帳	明治39年8月1日～12月1日	○
B-6-19	万日記おぼへ帳	明治40年6月24日～10月20日	○
B-6-20	明治四十年十月二十日ヨリ 日記おぼへ帖	明治40年10月20日～明治41年3月21日	○
B-6-21	明治四十一年八月 万おぼへ帖	明治41年8月～9月	×
B-6-22	明治四十一年十二月三十日ヨリ 日記色々おぼへ帳	明治41年12月29日～明治42年1月5日	○
B-6-23	明治四十二年九月ヨリ 万ひかへ帖	明治42年9月8日～明治43年1月9日	×
B-6-24	大正三年五月二十四日ヨリ 日記帖	大正3年5月24日～8月2日	○

【資料三】

<p><b>A 明治二八年二月二日</b></p> <p>十二月廿一日天気無事 朝何れも礼拝致し子供は 学校へ行くお千鶴は今日 午前十時頃より秋山へ行千頭 一生氏ニは中学校が今日より 休ミニ成るニ付三時頃つか地へ 帰られる其時くるまちゃんニ拾銭 御用立る東京より十二月十八日午前 六時ニ出せし書状同二十一日安着 す大きに御めぐみにより安らかに参 りつき病氣も次第に快方ニおもき 候よし実ニ有難くかんしや奉り申候 今日岡崎亀太郎香の物ヲつけ二くる 升に大根ニ拾銭分買ふ茶つけを だす○まつ生大根の代二十銭相渡ス ダウド先生そふ談ニ来るミかんくわし を出ス少しミかんをあげるゆちん 式銭四り拂</p>		<p><b>B 明治三七年五月二五日</b></p> <p>同二十五日天気無事水 朝いづれも礼拝致し聖書を 研究しさん美祈祷して 西洋人の所へせい書けんきうニ往く 今日日よふをやとふえんどふをかりて 其跡へ友大豆をまいて貰う東の北へ あづきをまく東の中四うねへごまを まく日よふちんを直に渡ス○三十五銭 相渡し済○高岡の千頭の親子さん 正午過ニ来られ茶つけを出ス当夜より とまる自分はえんとふをみニする 夜分もする雅子に少し手伝ふて もらう今日午後ニ義昌は秋山 よりかへりて直ニ小高坂嶋崎の 葬式へ往く辻ニ湯がわき入りニ行 うちのからすみにてわかす ○式拾七銭半紙巻束○四銭エン筆 代夜分聖書の友をなしさん美 祈祷して皆々休む ○客はとまる</p>
		<p><b>C 大正三年七月三一日</b></p> <p>同卅一日天気無事金 朝何れも礼拝をして食事をする 座敷のそふぢを所々をする ○旧約を読みさん美祈祷を なす新聞を少しよむ○昨夜 義祐ハ宮の内ニてつり花火を もらいし由雅子等は順之通り 肥立よる敷悦こぶ新聞は 今日は休み也○さんバさん来りて 湯をあひせてくれる肥立よろしく 大きに悦こぶ自分はおかみを結ふ 今日大工さんのよめさん悦こひ二くる 昨夕方唐いものまきをもらうよし ○今日もさんばさん来りゆをあひせ る義昌は高知へデンポヲを 打に往く○千頭俊夫氏来る おみやをもらいする○義昌は 高知より長濱通りかへる横濱へ 又デンポヲを打ツよしつふど金 ペイトヲとむきみそをかふてくる ○俊夫氏日暮ニかへる皆湯ニ入る 家庭の日課をよみさん美 祈祷して皆々休む</p>

【資料四】細川義昌日記（細川家資料 B-3-7）明治19年4月から5月より  
信仰に関する記録（抜粋）

日付	信仰に関する記録
4月10日	自分終日聖書研究
4月11日	夫婦雅義方清等ト教会ニ行 当夜通丁にて自分説教ス 夫婦雅ヲ連薊野吉村重任ヘ勤ニ行
4月17日	母堂御供し船通り高知ニ行
4月18日	教会ヘ三度行
4月20日	神学終日
4月22日	午後一時出立高知ニ行 教会ニ於テ説教ス
4月25日	風雨ニ付教会ニ行ヲ不得 宅ニテ聖日ヲ守る
4月26日	晩聖書研究会
4月29日	五時出立高知ニ行 木曜日ニ付教会ニ行
4月30日	夜祈祷会ニ行
5月1日	米国宣教師クリナンマカルヒン片岡山田山本老人原横山津田荒尾野村嘉之杯トコウ ノ邸ヘ昇ル
5月2日	早朝母堂教会ニ御出母子聖日ヲ守リ教会ニ出ツ
5月4日	聖書研究会
5月7日	芳原小松栄基督教ス、メニ行 道中来ル十日説教広告張紙ヲナス
5月9日	早朝千鶴ヲ連レ教会ニ行 夜通丁ヘ行説教
5月10日	片岡健吉山本秀煌来リ午後七時半より説教
5月11日	山本片岡杯ト正午より高岡ヘ行午後八時過キ（中略）森澤伊三郎控家ニ於テ説教
5月14日	明日感謝会之事ヲ通知
5月15日	高知教会設立一周年記念ノ為メ感謝会ニ付母堂津留ハ長濱通船ニテ自分千鶴雅ハ西 分通り歩行ニテ教会ニ行
5月16日	家内三度教会ニ出ツ
5月17日	聖書研究会
5月22日	母堂高知ニ被行
5月23日	教会ニ行午後三時ヨリ帰ル
5月27日	木曜日教会ニ行
5月28日	夜祈祷会ヘ行
5月30日	教会ヘ行 千鶴より教会建築の寄付金拾円ヲクリナンニ渡ス

【資料五】細川梶日記（細川家資料 B-6-8）より 明治36年2月の収支記録

	滞在場所	収入		支出		その他	
		内容	金額	内容	金額	贈り物	貰い物
1日	本宅			伝道金	2銭	カハラセンベ25枚・なし1つ	
2日	本宅			仰紙	3銭		
3日	別邸			からすみ（富殿へたのむ）	35銭		
4日	別邸			おかし	4銭	みかん	
				焼まん	5銭		
				遊び物	6銭		
				うめやき	2銭5厘		
5日	別邸			焼まん	10銭5厘		
				くわし	3銭		
6日	別邸			草り	不明		
7日	別邸						ワップ・バン・カンテンのくわし
							小あか鯛5尾・祝もち・大こん2本
							くじら
8日	別邸			伝道金	2銭		御ちそふ
				第二婦人祈祷会へ	5銭		
9日	別邸			あか鯛2尾	10銭		
				かんざし・仰紙	3銭8厘		
				めかね直し・かんざし直しちん	5銭		
				やきいも	2銭		
				くわし	2銭5厘		
10日	別邸			船ちん	4銭		
11日	別邸			せきだ直しちん	4銭5厘		
				やきいも	1銭5厘		
12日	別邸			げた	16銭5厘		
13日	別邸						
14日	別邸			義昌のクツ直しちん	不明		
				つぶ	3銭		
15日	別邸			伝道金	2銭		くわし1銭5厘
16日	本宅			船ちん	55銭		
				つぶあわ	5銭		
				くわし	10銭		
17日	本宅					金へいとふ・なし2つ	金へいとふ・誕生祝の金子・なし2つ
18日	本宅					山いものはんべん・玉子のはんじゆく・しらうゆ・カステイラ2切・なし1個	
19日	本宅						
20日	本宅			びんつけ	1銭		
				すりつけ	1銭7厘		
				髪結ちん	10銭		
				仰紙	3銭		
21日	本宅						肴
22日	本宅			伝道金	2銭		
23日	本宅	ぬか売上	4銭	さば武尾	14銭		
24日	本宅	ぬか（1升5合）売上	2銭	庭とり5羽	1円30銭	すもじのこぶまき	グイミ
		工物不足分	不明				菓子・はかたおりたば粉入
25日	本宅			税	10円	くわし少し	
26日	本宅	為替	15円				おもち
27日	本宅			仰紙	3銭	かわらせんべ3つ	しじみかい
						みかん	
28日	本宅						しじみかい